

英語雜学事典

THE DICTIONARY
OF
MISINFORMATION

KENKYUSHA

英語雑学事典

THE DICTIONARY OF MISINFORMATION



トム・バーナム著 堀内克明 編訳

KENKYUSHA



KENKYUSHA

〈 検印省略 〉

英語雑学事典

昭和 57 年 11 月 25 日 印 刷 昭和 57 年 11 月 30 日 初版発行

定 価 1900 円

原 著 者 トム・バーナム

編 訳 者 堀 内 克 明

発 行 者 植 田 虎 雄 東京都千代田区神田駿河台 2-9

印 刷 所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

(整 版 平和堂 印 刷)

発 行 所 研究社出版株式会社

〒102

東京都千代田区神田駿河台 2-9

電 話 東 京 (291) 0951 (販売)

 (291) 1416 (編集)

振 替 口 座 東 京 7-83761 番

ISBN 4-327-45040-5 C 1082 ¥1900 E

原 著 者 謝 辞

このような本を他人の助けを受けずに書ける人もいるかもしれない。しかし、私はそういう部類には入らない。まず、この分野で先鞭をつけた方々に敬意を表したい。それは、『ナンセンスの博物誌』*Natural History of Nonsense* の著者 Bergen Evans 氏と『ナンセンスの横行』*The Prevalence of Nonsense* および『確実なことに対する無知』*The Ignorance of Certainty* (すばらしい題ではないか!) の共著者である Ashley Montagu と Edward Darling の両氏である。特に Edward Darling 氏の惜しみない助力には特に脱帽したい。

また George Simpson, A.S.E. Ackermann, Vilhjalmur Stefansson の諸氏にも感謝する。Stefansson 氏が単なる探検家だと思う人は、楽しい序文がついた著書『誤りを探る冒険』*Adventures in Error* を読んでいただきたい。

基本的な道具として、『オックスフォード英語辞典』*Oxford English Dictionary*, 『ブリタニカ』*Britannica*, メリアム・ウェブスター (Merriam-Webster) 系の諸辞典, 万人の友『バートレット常用引用句辞典』*Bartlett's Familiar Quotations* を忘れてはならない。確かに John Bartlett 氏に敬意を表するのは、遅きに失するが、『バートレット』の 14 版の編者 Emily Morison Beck 氏は、幅広い興味と徹底的調査の両方を追求する(私もそうしているのだが——うまく行ったかどうかは諸兄の判断を仰ぐ)すべての人たちの模範となっているという点で賞讃に値する。

ニュージャージー州のパース・アンボイ (Perth Amboy, N.J.) からフィリピンにいたるまで、この企画のことをきいて私に有益な提案を書き送ってくださったすべての方々に感謝する。ポートランド州

立大学 (Portland State University) の人文科図書館司書の Edmond Gnoza 氏には、特別に感謝の言葉を述べたい。

また、Robert L. Crowell, Amy Kostant, Edwin Doremus, および Bernard Skydell の諸氏にお世話になったことを感謝の気持ちをこめて記したい。Crowell 氏の助けなくしては、この本は陽の目を見なかったであろう。他の方々——実際のところ、1人1人名前は知らない多くの方——の助力を得ないでは、まったくとは言わないまでも、はるかに大きな困難を伴ったにちがいない。

さらに Carlos Baker, Jerome Beatty, John Brown, オレゴン銀行シチズンズ支店の Helen McGuire, オレゴン州ポートランド市の KGW テレビの天気予報担当の Jack Capell, Elmer C. Case, Ralph Combs, John Gray, 海軍の就役前特務班「北極星」(Polar Star) の Robert Hammond, David Levin, Robert Mass, James Nardin, RTSC (Remember the Sacred Cows 「聖牛を忘れるな」) を(私と)共同設立した Edgar E. Renfrew, グッドイヤー・コミュニティ・リレーションズ部の Richard Sailer, Frederik Schuman の諸氏、並びにアルファベット順では少し順序が違うが、George Savage 氏にも感謝のことばを述べさせていただきたい。Savage 氏は、この本とは直接の関係はないが、私の知る限り文章作法で最高の教師である。

ポートランド州立大学の大勢の同僚が、大学の教職員は誤情報の宝庫であろうという私の提案を、幸いにもこちらが意図したとおりにご理解いただき、積極的に応じていただいた。英文学科では、Freeman Anderson, Tom Buell, John Cooper, Georgia Crampton, Ivan Curcin, Thomas Doulis, Philip Ford, Ross Garner (およびご夫人 Ann と令嬢 Margaret, 子息 Dave), Frederick Harrison, Michael Hollister, Robert Kelly, James Lill, Carl Markgraf, 故 Branford Millar, James Nattinger, Stanley Radhuber, Shelley Reece, Ralph Singleton, Robert Tuttle, Donald Tyree, 学部長の Frederick Waller, Baxter Wilson, Anthony Wolk, Samuel Yorks の諸氏の

ご協力をいただいた。

他に同大学では、図書館交換貸出し係の Evelyn Crowell, Nona Glazer-Malbin, John Hammond, Donald Hellison, George Hoffman, 故 Fred Holling, David Jannsen, Joseph Jones, Stephen Kosokoff, Miriam McKee, Thomas Palm, Dan Passell, Vera Petersen, Irene Place, David Smeltzer, Ralph Smith, John Trudeau, Richard Wiltshire の諸氏も同様である。

次に名前をあげる方々は、助力と提案を惜しまれなかった。Seldon D. Bacon, Patrick Barrett, Jacques Barzun, Franklyn M. Branley, Muriel B. Crowell, Joseph A. Davis, Jr., Alan S. Pomerance, Hugh Rawson, Axel Rosin, Leonard L. Rue III, Nicholas Slonimsky, Linda Stewart, John Terres, David L. Thomas, Edward Tripp, Chantal Veraart の諸氏である。

そして、雅量ある序文をいただいた Richard Armour, 貴重な編集眼をもつ Patricia Cooper, 写真家の Sam Adolf Oakland, 調査に助力をいただいた Star Reiersen, 優秀この上もないタイプ担当の Mary Reece, また Kathy Moeller, Lois Mock, 並びに Cindy Walker の諸氏, そして最後に, その忍耐と理解と愛情は私のことばでは言い尽くせない, わが妻 Phyllis に特別に感謝する。

以上のすべての方々とさらに多くの方々からお力添えをいただいた。

トム・バーナム

序　　文

リチャード・アーマー
(Richard Armour)

情報収集家は非常に多い。収集した情報をまとめたもの、すなわち、辞典、百科事典、年鑑、およびあらゆる種類の参考図書もまた多い。しかし、誤情報の収集家はめったにいない。実のところ、トム・バーナム (Tom Burnam) は、この種(たぶん絶滅の危険に瀕しているが危険ではない)の収集家で私が親しく存知あげている唯一の人である。このあまりお目にかからない英語の教授は、他の人が事実をもてあそんでいるのに対して間違いを見つけて楽しんでいる。彼は一般に受け入れられている間違った考え方を、楽しみながら真剣に調べたことについて、数年前、私に手紙をよこした。私もまた他人の間違いを訂正することをひどく楽しむと同時に、自分が時に(しばしば)間違っていることがあるのをいさぎよく認めるものだから、彼と私は散発的ではあっても、長期にわたる手紙のやりとりを始めた。私たちの文通がそれほど長続きの理由は、彼の仕事が長期にわたり、かつ困難なものとなったからである。私たちの多くは、いわゆる事実なるものについて、彼が最初に思ったよりもずっと間違えていることが多いという事実をトム・バーナムは発見した。

だが、ついに彼は、私たちの多くが演説や執筆で自信をもって説明してきた数々の誤信をまとめた。私たちが真実だと思っているもの——名有な引用句の原作者、あることばの語源、歴史上の出来事、科学の法則、文法の規則、だれが何を発明したか、あるいは、おぼれかかっている人は必ず3度浮かび上がるというような広く受け入れられている「事実」——が間違っていることが判明する。真実の探求者

バーナムは、間違いの宣告に精力的である。こうして、「おぼれかけている人は必ず3回浮かび上がる」という上述の信じ込みについて、彼は「真赤なうそでとんでもないでたらめ」と評している。次いで彼は理由を説明して行く。

読者の方々の中には、正しいと確信していたことが間違っていたとわかって当惑する方々がいるかもしれない。またなかには学者や自称インテリでさえも間違っているのを見つけてよろこぶ人もいるだろう。その他にも、この本の著者と一緒になって、大きな問題でも小さな問題でも、真実を求めることを楽しむ方もいるだろう。それはあなたの自我を少し損うくらいでどのみち損にはならない。ゲームをやるようなものである。

私も、私たちに卓説と楽しみをもたらしてくれたことに対し、トム・バーナムに敬意を表する。私はしっぽを出しても、しっぽをつかまれても、しっぽを巻いて逃げたりせず、進んでしっぽを振って感謝したい。

原著者まえがき

そもその始まりは、『サタデー・レビュー』*Saturday Review* 誌の「不死鳥の巢」(Phoenix Nest) 欄で、その記事自体と同じくらいの長さの題がついた私の短い記事の掲載にあった。題名は「どうせだれも信じないから、人に聞かせるのがいやになった百パーセント確実な真実の情報」(“One Hundred Percent Certified True Information I Am Tired of Carrying Around Since Nobody Believes It Anyway.”) というものであった。ロバート・クローウェル (Robert L. Crowell) 氏がその記事を見かけて、大きなものになりそうだなどとほめかさなかったならば、その記事はそこで終りになったかもしれない。こういうわけで生まれたのが『誤情報の辞典』*Dictionary of Misinformation* である。

しかしながら、道すがら、いくつかの決定をしなければならなかった。この本は、奇妙な事実やあまり知られていない真実を集めた本にはしないことにした。それとは正反対の本である。これは、奇妙な(あるいはあまり奇妙ではない)「非」事実や、あまりにも知られすぎている「非」真実を集めた本にすることにした。それから私は頭初から非合理的な (nonrational) ものを扱おうとせず、不合理な (irrational) ものだけを扱うことにしようと提案した。私は常に、世人が科学的証拠を考慮しないで受け入れようとする確信——たとえば、処女生誕説 (Virgin Birth)——と、科学的証拠に頑強にさからって抱く確信——たとえば、死刑は犯罪を抑止するというもの——とを区別しようとしてきた。

読者は、本書で後者の例を多数みつけるだろうが、前者はまったく含まれていない。奇跡はここではなくつがえられてはいないし、幽霊を

安らかに眠らせてはいない。なぜなら、奇跡は(幽霊はもちろんのこと)どう見ても、自然法則の停止だからである。言いかえれば、ここでは信仰の問題ではなく、理性の問題を扱う。そこで、世紀の著名なユーモア作家ジョッシュ・ビルリングズ (Josh Billings) の言葉をわかりやすく言いかえれば、私たちがつまづくのは、私たちの推理力が杖の役目をしなかったからではなく、私たちの知っている事柄が本当ではないためだと思う。

トム・バーナム

編訳者はしがき

著者の Tom Burnam は、ポートランド州立大学の英語担当の教授であるから、本書の内容は、英語学や英米文学に関連するものが少なくないが、それに限られているわけではない。Burnam は同僚の援助を求めているので、ポートランド州立大学のあらゆる専門分野がこの本に含まれている。生物学、工学から歴史、スポーツに至るまでのあらゆる題目が扱われている。これは一種の百科事典である。しかし、言葉の定義や意味内容に関する辞典という要素も強い。したがって、本書では 3 種類の索引を用意して、あらゆる面から利用できるようにした。もちろん、索引とは無関係に、本文を思いつくままに拾い読みすることも自由である。そういう気晴らしの本として見ても楽しい読み物になる。

英米人にとって何が誤情報であり、迷信であるかということも、日本人にとっては大いに参考になるはずである。

また、この本によく出てくる独立戦争、南北戦争、アメリカ史などについての迷信や誤信は、日本人にとってはなじみがないかもしれないが、そういう考え方が一般に信じられているという事実をまず知らなければならない。

さらに、大部分の日本人にとって、そのような誤信や誤情報の土台となっている史実や、事実についての前提となる知識が不足している点も反省させられる。本書はそのような基本的知識を学んだり確認したりする手掛りともなる。

このような意味で本書を縦横に利用していただければ幸いである。

ところで、この序文を書く少し前に、編訳者の「アメリカニズムと言語汚染」という記事が月刊誌『言語』1982 年 3 月号に載った。

その終りのほうで、Pennsylvania Dutch が「ペンシルヴェニア・オランダ語」となっているのには、胆をつぶすほどびっくりした。というのは、私自身は「ペンシルヴェニア・ドイツ語」と原稿に書いておいたのだが、担当の編集者が私の誤記と思って、気をきかせて「オランダ語」に訂正してしまったのである。さっそく、あちこちから、そんな初歩的なことも知らないのかという、きつい叱責や非難の言葉をいただいた。

Pennsylvania Dutch という場合の Dutch は「オランダ語」ではなくて、「ドイツ語」という意味であることは、簡単な英和辞典にも出ているが、アメリカ英語に関心のない人は、Dutch に「オランダ語」以外の意味があるとは夢にも思わないのだろう。

この場合の Dutch の意味内容と用法については、本書の Pennsylvania Dutch の項目を参照されるとよい。この Dutch をオランダ人とするのは典型的な misinformation の 1 つである。『研究社新英和大辞典』(1980)の Pennsylvania Dutch の項で、「1. ペンシルベニアダッチ《ドイツ南西部から 17-18 世紀に米国 Pennsylvania 南東部に移住した南部ドイツ人とスイス人の子孫》2. 東部 Pennsylvania 州で話される英語交りのドイツ語方言」というのは正しいが、「3. 家具などのペンシルベニアのオランダ風《ペンシルベニアダッチの民俗的工芸・装飾の様式》」という個所では、上記の編集者と同じような誤りをおかしている。

アメリカでも、いわゆる Penn Dutch や Amish の家具や工芸品に関心のあるインテリなら、「オランダ風」でないことぐらいは心得ている。しかし、言語の専門家が編集した辞典でも、Dutch はオランダという固定観念から逃れられなかったのだから、本書の存在価値はきわめて高いと言わなければならない。

これはほんの一例である。本書では、さまざまな誤情報と非事実(つまり嘘)があばかれ、くつがえされる。「……と思うかもしれないが、それはまっかなうそである」と読者は絶えずどんでん返しにあう。あ

っさり投げとばされた読者は、舌打ちしながらも、著者の小気味よい技に感心しないではいられない。

時には若干の勇み足もあったが、それは1977年のペーパーバック版 (Ballantine Books) でほとんど訂正されている。本書は原則として新版に従ったが、誤った説の由来や発展を示すため、注をつけて1975年の初版の記述を残しておいた部分がある。なお、Tom Burnam には *More Misinformation* (1980) という続編がある。ペーパーバックでは Ballantine 版 (1981) となっている。

なお、著者自身の説明に含まれる *misinformation* またはそれに類するものについては、編訳者が注をつけるようにした。つまり、「誤情報の誤情報」を検討した。しかし、そのような個所はあまり多くはない。その他の注はすべて老婆心からつけたもので、日本の読者にはなじみがない事実や参考事項を必要最小限だけ解説するようにした。

本文中では、人名と地名について、最低限の注をつけた。日本ではなじみのない人名や歴史上の事実も多いからである。これは〔 〕で囲んである。「クマ」(bear) というように、()で囲んで英語を入れたのは、主として、索引にあげられた事項を示すためと、引くときに求める語が一目で見つかるようにしたためである。原著では引用句も一般事項と同列に並べられているが、本書では引用句と決まり文句の類は最後にまとめた。引用句の索引には、その他の本文中に含まれている引用句も含めるようにした。また、迷信、ことわざの類や、コマーシャルの文句、歌詞などもこの索引に収めた。

本書の翻訳は藤井寛氏と佐々木謙一氏に分担していただいた。注の一部分にも両氏が書かれたものがある。編訳者は本文中の数項目と追加訂正項目を訳したほか、訳文を検討し、全体を統一するように努めたが、訳の調子がやや異なる場合があるかもしれない。頭初の方針で、原文に近い直訳調の翻訳になっているが、それを多少読みやすくするために、原文の事実を変えない範囲で訳文を修正したところがある。したがって、対訳的な直訳ではない個所があちこちに生じている

が、上記のような口調の統一と読み易さを考慮したためである。ご了解いただければ幸いである。

なお、引用句のうち 23 項目と序文、まえがき、謝辞は須永紫乃生さんに、また 5 項目は担当編集者の茂木昇氏に訳していただいた。人名などの細かい事実の調査と面倒な索引も茂木氏にお願いした。たとえば、『4 つの署名』*The sign of four* の注や、*Yankee Doodle* の歌詞は同氏の調査によるものである。また、本書の実現は水上峰雄氏の御助力によるところが大きい。水上氏は全体の構成を立案されたほか、最初の訳文の加筆訂正と編集を担当された。これらの方々に心から感謝したい。

もちろん内容の不備や誤りに関しては全体に目を通した編訳者の責任である。お気づきの点をご教示いただければ、今後版を重ねる度に改めていきたい。このような内容の辞典ではそれがいちばん大切な方針であると信ずる。

昭和 57 年 9 月

堀 内 克 明

目 次

原著者謝辞.....	v
序 文.....	ix
原著者まえがき.....	xi
編訳者はしがき.....	xiii

英語雑学事典

本 篇.....	1
引用句篇.....	435
索 引	
日本語.....	497
英 語.....	543
引用句.....	591

A

abacus (そろばん) 多くの人のみならず、少なからざる参考書までが、そろばんは東洋人の専用だと思い込んでいる。これは正しくない。そろばんは、古代ギリシャおよびローマで、広範に使用された。また、現代でも、その使用は東洋に限られているわけではない。ソヴィエト (Soviet Union) では、そろばんは普通に使われており、今日しばしば、レストランでウェイトレスが、勘定書を持ってこないで、お客にそろばんをみせたりする。また、国境で両替の計算に使われたりもする。これは、他のところなら、しばしば精巧な小型計算機を使ってやるところである。ソ連国境の係員が、小さなそろばん1つを使って、何10種類もの他国通貨をルーブルやコペイクに両替する。そのスピードをみた人は、熟練した手にかかるると、そろばんは近代的な機器と同じくらい速いことを証言するであろう。

Absalom *Absalom caught by the hair* (髪で捕まったアブサロム*) 大部分の参考書が書いている話の筋では、エフライムの戦い (the battle of Ephraim) で、アブサロムのラバがカシの木の下を通ったとき、アブサロムの髪が枝にからみ、彼は宙づりになって、ラバは行ってしまった、ということになっている。しかしそれは、聖書(「サムエル記下」18章9節)の述べているところとは違う。原文は、「彼の頭がカシの木にかかった」(his head caught hold of the oak) となっている。言葉を換えれば、彼の頭が「茂った木の枝」の間にはさまった形になったものだろう。髪で宙づりになったという考え方は、おそらく、「サムエル記下」(II Samuel) 14章26節の記述、つまり、アブサロムは1年に1度しか髪を刈らず、その刈った

髪の毛は 200 シェケル (shekel), すなわち約 2.8 キロもあったという記述から広まったものであろう。

*Absalom はタビデの第 3 子で父にそむいて殺された。ダビデはこの不肖の子を最も愛した。

ace *first American "ace" in World War I* (第 1 次世界大戦におけるアメリカ最初の「空の勇士」) 敵機 5 機を撃墜して第 1 次世界大戦でのアメリカ最初の空の勇士 (ace) [アメリカでは 5 機以上の撃墜者, イギリスでは 10 機以上の撃墜者に与えられる呼称] になったのは, エディ・リッケンバック (Eddie Rickenbacker) 大尉 [1890-1973] ではなかった。その自叙伝『リッケンバック』*Rickenbacker* (1967) の中で彼は, 1918 年の春, フランスで自分が戦闘飛行に就いたとき, すでに何人か空の勇士がいた, と述べている。その 1 人にラウル・ラフベリー (Raoul Lufbery) [1885-1918] がいる。リッケンバックはラフベリーを「比類なきアメリカの空の勇士」(the American ace of aces) と呼んでいる。ラフベリーはフランス生まれだったが, 若いときアメリカに移住していた。しかし, リッケンバックは結局, 他のどのアメリカの飛行士よりも多くの敵機を撃墜することになった。その数 25 機, そのうち 4 機は飛行船だった。しかし, アメリカ最初の ace(空の勇士) になったのは彼ではなかった。

自叙伝の中の説明によると, リッケンバックの綴りは, もともと *Rickenbacher* だった。リッケンバックが h を k に変えたのは, ドイツ系の印象を少なくするためであったという。

acne (にきび) 目ざわりな皮膚の脂肪分泌腺 (oil glands of the skin) [皮脂腺] の病気であるにきびは, それに悩む若者には, 大変な頭痛の種となる。この病気は, 20 代には, はるかに少なくなってくる。このために, 多くの人は, にきびは性行為によって軽くなると信じ, 「結婚したら, 直るよ」(It'll clear up when he gets married.) と言ったりする。にきびは性行為とは全く関係がない。